一日一題

生きてさえいれば

AMDA理事　難波　妙

2008年、モンゴルからの帰り。韓国・仁川（インチョン）発岡山行きの飛行機の中で、1人のモンゴル人女性と出会った。名前はセーギー。文部科学省の国費外国人留学生として岡山大大学院で植物学を専攻していた。その時は、携帯電話の番号を渡して別れた。

それから3年後の11年9月、モンゴルの空港で、結婚して多くの親戚に見送られて岡山に向かうセーギーと偶然再会した。幸せの絶頂を絵に描いたような光景だった。

さらに半年後、セーギーから1本の電話が入った。「AMDAに行ってもいいですか」。弱々しい声だった。約束の日、目の前に現れたセーギーは前回会った時の彼女とは全く違っていた。満身創痍（そうい）の状態。一瞬にして「何かが起きた」と直感した。

話を聞くと、夫ががんで亡くなったというのだ。遠く離れた岡山の地で、言葉もままならない中、消えゆく命と向き合った日々。日本での治療を断念し、母国で夫の最期をみとった悲しみに慟哭（どうこく）した。

壮絶な日々はこれで終わりではなかった。彼女は妊娠していたのだ。それも双子を。気力、体力の落ちた中での妊娠は危険を伴う。結局、入院し、点滴を受けながら卒業論文の執筆に追われていた。

そして、12年4月25日、無事に双子を出産した。名前は「ウンナル」と「ウンサル」。日本語で「太陽」と「月」を意味するという。

生まれてくる命、わが子の顔を見ることなく天国に逝った父親のことを思うと心がつぶれそうになった。彼女にはすぐに双子の子育てという現実がのしかかった。それでも13年10月、セーギーは見事に同大大学院の博士課程を修了した。

今年3月、6歳になる直前のウンナルとウンサルに会った。セーギーは今、米国の団体の支部長としてゴビ砂漠の環境保全活動にまい進している。

生きてさえいれば、その日々は確実に希望へとつながっている。

2018・6・12